ニョロ語動詞アクセント試論

A Tentative Tonal Analysis of Nyoro Verbs

湯川恭敏

Yasutoshi Yukawa

はじめに

ニョロ語((o)rúnyoro)というのは、アフリカのウガンダの西部に話されるバントゥ系の言語で、トーロ語やンコレ語・チガ語と近い。[1]

本論文でこの言語の表記に用いる子音字とその概略的音価は、次の如くである。ほぼ、慣用的正書法に従う。

b ([β]～[b]), ch ([tʃ]), d ([d]), f ([f]), g ([g]), h ([h]), j ([dʒ]),
k ([k]), m ([m]), n ([n]), ny ([ɲ]), p ([p]), r ([r]), s ([s]), t ([t]),
w ([w]), y ([j]), z ([z]), m/n (子音前鼻音). [2]

母音字は、次の通りである。

i ([i]), e ([e]), a ([a]), o ([o]), u ([u]).

アクセントは、母音（または子音前鼻音）の上の ´ で「高」を、^ で「下降調」を、ˇ で「上昇調」を、無印で「低」をあらわす。

この言語における人称主格・対格接辞[3]の形は、次の通りである。

	主格	対格		主格	対格
単数１人称	N	N[4]	複数１人称	tu	tu
２人称	o	ku	２人称	mu	ba
３人称	a	mu	３人称	ba	ba

クラス[5]主格接辞・対格接辞は、次の通りである。クラスは、名詞例で示す。ハイフンは、（冒頭母音つきの）接頭辞と語幹の境界を示す。I ～ VII, IXは単数名詞のクラス、VIII, X は単複の区別のないクラス、XI以降は複数名詞のクラスである。アクセント表示は省略する。

I.	omu-ntu「人」	単数３人称に同じ	
II.	omu-ti 「木」	gu	gu
III.	eri-ino「歯」, ei-gufa 「骨」	ri	ri

IV.	eki-gere 「足」	ki	ki
V.	en-go「豹」	e	gi
VI.	oru-goye 「着物」, oru-ra「腸」	ru	ru
VII.	aka-nyonyi 「鳥」	ka	ka
VIII.	obu-twa「毒」	bu	bu
IX.	oku-tu 「耳」	ku	ku
X.	otu-ro 「眠り」	tu	tu
XI.	aba-ntu 「人」 cf. I.	複数3人称に同じ	
XII.	emi-ti 「木」 cf. II.	e	gi
XIII.	ama-ino「歯」, ama-gufa「骨」, ama-ra「腸」, ama-tu「耳」 cf. III/VI/IX.	ga	ga
XIV.	ebi-gere 「足」 cf. IV.	bi	bi
XV.	en-go「豹」, en-goye 「着物」 cf. V/VI.	zi	zi
XVI.	obu-nyonyi 「鳥」 cf. VII.	bu	bu

この他に、対格接辞の一種として再帰接辞e[6] があるが、これは直前の母音と融合する。

主格接辞をS であらわすが、単数2人称・3人称 (= クラスI)およびクラスV/XII の主格接辞とその他の主格接辞を異なって表記したほうがよい場合があり、そのような場合、前者をS_1、後者をS_2で[7] あらわす。対格接辞をO であらわし、再帰接辞は、上述の如く直前の母音と融合してあらわれるので、アクセント表示では、実際の音形であらわす。

この言語の動詞自体は、元来のアクセントの型（他の言語の分析では、A型・B型[8] と呼んでいる）の対立を失っている。

なお、記述の便宜上、語幹が子音ではじまる動詞のみを扱い、語幹が母音ではじまる動詞についてはあとで触れることにする。あとに目的語等が続く場合、動詞のアクセントに変化がおこる場合もあるが、この問題についてもあとで触れる。

この言語の南に話されるトーロ語がアクセント対立を失っていることと関連があるのかも知れないが、（このインフォーマントの発音自体が聞き取りにくいのに加えて）アクセントはかなりブレる。[9]

§1. 不定形

この言語の動詞にも、不定形と呼んでよい形およびその否定形がある。

§1—1. 肯定不定形

肯定の不定形（「～すること」の意）は、

oku + （対格接辞 +）語幹 + a （oは冒頭母音）

という構造を有し、アクセントは、かなりブレるが、次のように表示しうるものであると推定できそうである。C は子音(+半母音) を、V は母音をあらわし、R は母音もしくは子音前鼻音(N) をあらわす。X は任意の音素列を示す。+ III は、調整規則III[10]を付け加える必要がある、の意である。

okuCV́CV́(Ŕ)X (X = Ca なら、(Ŕ) は(R) となる。X = Øなら、Ŕ はあらわれず、その前のCV́はCVとなり、語幹直前の母音が高くなる。X = Øなら、CV́(Ŕ) もØでありうるが、CV́はCV̂となり、語幹直前の母音が高くなる。「調整規則I 」と呼ぶ) /

okuCVRCV́(Ŕ)X (X = Ca なら、(Ŕ) は(R) となる。X = Øなら、( ) 内のŔ はあらわれず、その前のCV́はCVとなり、最初のCVが高くなる。「調整規則II」と呼ぶ),

okuOCV́(Ŕ)X (X = Ca で、Ŕ があらわれれば、Ŕ はR となる。あらわれなければ、語幹直前の母音が高くなる。X = Øなら、Ŕ はあらわれず、CV́はCVとなり、語幹直前の母音とその前の母音が高くなる。「調整規則III 」と呼ぶ),

okweeCV́(Ŕ)X (+ III).

okúryâ「食べる」, okújúma 「罵る」, okukózésa 「雇う」,

okubóhóora「ほどく」, okukáránga「煎る」, okupápááruka 「飛ぶ」,

okuríisa「食べさせる」, okurínda「待つ」, okusindíka「押す」,

okusiimúura 「拭く」,

okuzingúrura「（折った部分を）伸ばす、もつれをほぐす」,

okusuuréébesa 「吊るす」[11] ;

okúkírya「それ（クラスIV）を食べる」, okumújúma 「彼を罵る」, okumukózesa,

okumubóhoora, okubikáranga「それ（クラスXIV)を煎る」, okumuríisa,

okumurínda, okumusíndika, okumusíímuura, okukizíngurura, okukisúúreebesa;

okweéjúma 「自分を罵る」, okweekózesa, okweebóhoora, okweeríisa,

okweesíímuura.

上の例のうち、okusindíkaはokusíndíkaのように聞こえることもあるが、前者のように解釈する。また、okúkíryaはokukíryaのように聞こえることもあるが、前者のように解釈する。

§1—2.　否定不定形

§1—1の形に対応する否定形（「〜しないこと」の意）は、

oku + ta +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

okutáCV́X（X =Øなら、CV́はCVとなり、kuはkúとなる。「調整規則IV」と呼ぶ），

okutáÓX, okuteeCV́X.

okútárya「食べない」, okutájúma 「罵らない」, okutákózesa, okutábóhoora,

okutápápaaruka, okutáríisa, okutárínda, okutásíndika, okutásíimuura,

okutázíngurura, okutásúureebesa;

okutákírya「それを食べない」, okutámújuma 「彼を罵らない」, okutámúkozesa,

okutámúbohoora, okutámúriisa, okutámúrinda, okutámúsindika, okutámúsiimuura,

okutákízingurura, okutákísuureebesa;

okuteejúma「自分を罵る」, okuteekózesa, okuteebóhoora, okuteeríisa,

okuteesíimuura.

§2.　直説法形

直説法形に用いられる語尾としては、a/ire/irege/e/aga がある。なお、複合形はあとでまとめて扱うことにする。

§2—1.　語尾a を用いる形

まず、不定形と同じ語尾を用いる形から見る。

§2—1—1.　遠過去形

昨日あるいはそれ以前の過去のある時点において行われた行為をあらわす形は、

主格接辞 + ka +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

SkaCV́CV́(Ŕ)X（+ I）/ SkaCVRCV́(Ŕ)X（+ II）, SkaOCV́(Ŕ)X（+ III）,

SkeeCV́(Ŕ)X（+ III）.

akáryâ「彼は食べた」, akájúma 「彼は罵った」, akakózésa, akabóhóora,

akakáránga, akapápáárukạ, akaríisa, akarínda, akasindíka, akasiimúura,

akazingúrura, akasuuréébesa;

akákírya「彼はそれを食べた」, akamújúma 「彼は彼（別人）を罵った」,
akamukózesa, akamubóhoora, akamuríisa, akamurínda, akamusíńdika,
akamusíímuura, akakizíńgurura, akakisúúreebesa;
akeéjúma「彼は自分を罵った」, akeekózesa, akeebóhoora, akeeríisa,
akeesíímuura.

akákíryaは、akakíryaと聞こえることもあるが、確認した結果、前者の如く解釈する。

§２—１—２.　現在形

いつも行われる行為をあらわす形は、

主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、主格接辞+ 再帰接辞の形は単数１～３人称でnyee/owe/ayeとなる。これらも含めて、Seであらわすことになる。アクセントは、次のように表示しうる。

SXŘCa (X = C なら、Ř はV́ でありそのV́ はV となる。X = Øなら、Ř もØである。「調整規則V 」と呼ぶ),

SOXŘCa (X =Øなら、Ř もØであるが、CaはCâとなり、語幹直前の母音が高くなる。「調整規則VI」と呼ぶ),

SeXŘCa (+ VI).

arya「彼は食べる」, ajuma 「彼は罵る」, akozésa, abohoóra, akarańga,
apapaarúka, ariísa, arińda, asindíka, asiimuúra, azingurúra, asuureebésa;
akíryâ「彼はそれを食べる」, amujúma 「彼は彼を罵る」, amukozésa, amubohoóra,
abikarańga, amuriísa, amurińda, amusindíka, amusiimuúra, akizingurúra,
akisuureebésa;
ayejúma 「彼は自分を罵る」, ayekozésa, ayebohoóra, ayeriísa, ayesiimuúra;
barya 「彼らは食べる」, bajuma, bakozésa, etc.;
bakíryâ, bamujúma, bamukozésa, etc.;
beejúma, beekozésa, etc.

§２—１—３.　現在進行形

今行われている行為をあらわす形は、

主格接辞 + ku + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

SkuCV́CV́(Ŕ)X (+ I) / SkuCVRCV́(Ŕ)X (+ II), SkuOCV́(Ŕ)X (+ III),
SkweeCV́(Ŕ)X (+ III).
akúryâ「彼は食べている」, akújúma 「彼は罵っている」, akukózésa, akubóhoora, akukáránga, akupápáaruka, akuríisa, akurínda, akusindíka, akusiimúura, akuzingúrura, akusuuréébesa;
akúkírya「彼はそれを食べている」, akumújúma 「彼は彼を罵っている」, akumukózesa, akumubóhoora, akubikáranga, akumuríisa, akumurínda, akumusíndika, akumusíímuura, akukizíngurura, akukisúúreebesa;
akweéjúma 「彼は自分を罵っている」, akweekózesa, akweebóhoora, akweeríisa, akweesíímuura.

§２—１—４.　現在継続形

まだ行われている行為をあらわす形は、

主格接辞 + kyaa + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは次の如く表示しうる。再帰接辞はyeであらわれるが、その前では、kyaaはkya となるようである。

SkyaaCV́X (X =∅なら、CV́はCVとなりkyaaはkyáaとなる。「調整規則VII 」と呼ぶ),
SkyaaÓX, SkyayéX.
akyáarya「彼はまだ食べている」, akyaajúma 「彼はまだ罵っている」,
akyaakózesa, akyaabóhoora, akyaapápaaruka, akyaaríisa, akyaarínda,
akyaasíndika, akyaasíimuura, akyaazíngurura, akyaasúureebesa;
akyaakírya「彼はまだそれを食べている」,
akyaamújuma 「彼はまだ彼を罵っている」, akyaamúkozesa, akyaamúbohoora,
akyaamúriisa, akyaamúrinda, akyaamúsindika, akyaamúsiimuura,
akyaakízingurura, akyaakísuureebesa;
akyayéjuma「彼はまだ自分を罵っている」, akyayékozesa, akyayébohoora,
akyayériisa, akyayésiimuura.

akyaajúma は時にakyaájúma と聞こえることもあるが、確認した結果、前者の如くに解釈する。ただし、後者のような発音も存在する可能性がある。存在するなら、おそらく、～CV́CV́(Ŕ)X (+ I) / ～CVRCV́(Ŕ)X (+ II)というアクセントからの類推として生じたものであろう。§２—１—３参照。また、この形のアクセントは、他の活用形のそれとは

かなり異なり、異質な形の混入の可能性がある。

§2—1—5.　未来形（1）

その日、翌日、翌々日くらいに行われる行為をあらわす形は、

主格接辞 + ija + ku +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造のものがある。主格接辞+ijaの形は、nyija/oija/aija/twiija/mwiija/baija 等々である。アクセントは次の如く表示しうる。

SijakuCV́CV́(Ŕ)X（+ I）/ SijakuCVRCV́(Ŕ)X（+ II）, SijakuOCV́(Ŕ)X（+ III）,

SijakweeCV́(Ŕ)X（+ III）.

aijakúryâ「彼は食べる」, aijakújúma「彼は罵る」, aijakukózésa,

aijakubóhóora, aijakukáránga, aijakupápááruka, aijakuríisa, aijakurínda,

aijakusindíka, aijakusiimúura, aijakuzingúrura, aijakusuuréébesa;

aijakúkírya「彼はそれを食べる」, aijakumújúma「彼は彼を罵る」,

aijakumukózesa, aijakumubóhoora, aijakubikáranga, aijakumuríisa,

aijakumurínda, aijakumusíndika, aijakumusíímuura, aijakukizíngurura,

aijakukisúúreebesa;

aijakweéjúma「彼は自分を罵る」, aijakweekózesa, aijakweebóhoora,

aijakweeríisa, aijakweesíímuura.

主格接辞+ija+ku の代わりに、主格接辞+ijaa を用いる形も、（多分、語幹がC だけから成る動詞を除き）可能なようである。kuが高い場合でも、ijaaの最後のa は高くならない。

aijaajúma, etc.

§2—1—6.　未来形（2）

§2—1—5の形と同様の意味をあらわす形は、

主格接辞 + raa +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有し、アクセントは次の如く表示しうる。raa は再帰接辞の前では短くなるようである。

SraaXŔCa（X =Øなら、Ŕ もØであるが、CaはCâとなる。「調整規則VIII」と呼ぶ),

SraaOXŔCa（+ VI）, SrayeXŔCa（+ VI）.

araaryâ「彼は食べる」, araajúma「彼は罵る」, araakozésa, araabohoóra,

araakaraǹga, araapapaarúka, araariísa, araariǹda, araasindíka, araasiimuúra, araazingurúra, araasuureebésa;

araakíryâ 「彼はそれを食べる」, araamujúma「彼は彼を罵る」, araamukozésa, araamubohoóra, araabikaraǹga, araamuriísa, araamurǹda, araamusindíka, araamusiimuúra, araakizingurúra, araakisuureebésa;

arayejúma 「彼は自分を罵る」, arayekozésa, arayebohoóra, arayeriísa, arayesiimuúra.

§2—1—7. 遠未来形

翌々日もしくはそれより後に行われる行為をあらわす形は、

主格接辞 + ri + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有する。

A型: SriXŘCa (+ VI), SriOXŘCa (+ VI), SryeeXŘCa (+ VI).

arírya̍「彼は食べる」, arijúma 「彼は罵る」, arikozésa, aribohoóra, arikaraǹga, aripapaarúka, aririísa, aririǹda, arisindíka, arisiimuúra, arizingurúra, arisuureebésa;

arikíryâ 「彼はそれを食べる」, ariamujúma「彼は彼を罵る」, arimukozésa, arimubohoóra, aribikaraǹga, arimuriísa, arimurǹda, arimusindíka, arimusiimuúra, arikizingurúra, arikisuureebésa;

aryeejúma 「彼は自分を罵る」, aryeekozésa, aryeebohoóra, aryeeriísa, aryeesiimuúra.

§2—1—8. 現在否定形

2—1—2の形に対応する否定形は、

ti + 主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは次の如く表示しうる。 ti+主格接辞の形は、単数2人称・3人称・クラスV/XII で、to/ta/teであり、これを ‘S_1であらわす。その他の場合は、tiS_2であらわす。単数2人称・3人称・クラスV/XII のti+ 主格接辞+ 再帰接辞の形は、towe/taye/teyeである。

‘S_1XŘCa (+ VI), ‘S_1OXŘCa (+ VI), tiS_1eXŘCa (+ VI).

tiS_2XŘCa (+ VI), tiS_2OXŘCa (+ VI), tiS_2eXŘCa (+ VI).

táryâ 「彼は食べない」, tajúma「彼は罵らない」, takozésa, tabohoóra, takaraŋ́ga, tapapaarúka, tariísa, tariŋ́da, tasindíka, tasiimuúra, tazingurúra, tasuureebésa;

takíryâ 「彼はそれを食べない」, tamujúma「彼は彼を罵らない」, tamukozésa, tamubohoóra, tabikaraŋ́ga, tamuriísa, tamuriŋ́da, tamusindíka, tamusiimuúra, takizingurúra, takisuureebésa;

tayejúma「彼は自分を罵らない」, tayekozésa, tayebohoóra, tayeriísa, tayesiimuúra;

tibáryâ 「彼らは食べない」, tibajúma, etc.;

tibakíryâ, tibamujúma, etc.;

tibeejúma, etc.

§2—1—9. 現在進行否定形

§2—1—3の形に対応する否定形は、

ti + 主格接辞 + ku + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次の如く表示しうる。

'$\acute{S}_1$kuC$\acute{V}$C$\acute{V}$($\acute{R}$)X (X = Ca なら、($\acute{R}$) は(R) となる。X = Øなら、$\acute{R}$ はあらわれず、その前のC$\acute{V}$はCVとなる。X = Øなら、直前のC$\acute{V}$($\acute{R}$) もØでありうるが、C$\acute{V}$はC$\hat{V}$となる。「調整規則IX」と呼ぶ) /

'$\acute{S}_1$kuCVRC$\acute{V}$($\acute{R}$)X (+ II),

'$\acute{S}_1$kuOC$\acute{V}$($\acute{R}$)X (X = Caで、$\acute{R}$ があらわれれば、$\acute{R}$ はR となる。あらわれなければ、語幹直前の母音が高くなる。X = Øなら、$\acute{R}$ はあらわれず、C$\acute{V}$はC$\hat{V}$となり、語幹直前の母音が高くなる。「調整規則X 」と呼ぶ),

'$\acute{S}_1$kweeC$\acute{V}$($\acute{R}$)X (+ X);

ti$\acute{S}_2$kuC$\acute{V}$C$\acute{V}$($\acute{R}$)X (+ IX) / ti$\acute{S}_2$kuCVRC$\acute{V}$($\acute{R}$)X (+ II), ti$\acute{S}_2$OC$\acute{V}$($\acute{R}$)X (+ X), ti$\acute{S}_2$kweeC$\acute{V}$($\acute{R}$)X (+ X).

tákuryâ 「彼は食べていない」, tákujúma「彼は罵っていない」, tákukózésa, tákubóhóora, tákukáránga, tákupápáaruka, tákuríisa, tákurínda, tákusindíka, tákusiimúura, tákuzingúrura, tákusuuréébesa;

tákukíryâ 「彼はそれを食べていない」, tákumújúma「彼は彼を罵っていない」, tákumukózesa, tákumubóhoora, tákubikáranga, tákumuríisa, tákumurínda,

tákumusíndika, tákumusíímuura, tákukizíngurura, tákukisúúreebesa;
tákweéjúma「彼は自分を罵っていない」, tákweekózesa, tákweebóhoora,
tákweeríisa, tákweesíímuura;
tibákuryâ 「彼らは食べていない」, tibákujúma, tibákukózesa, etc.;
tibákukíryâ, tibákumújúma, tibákumukózesa, etc.;
tibákweéjúma, tibákweekózesa, etc.;
tíńkuryâ「私は食べていない」, tíńkujúma, tíńkukózesa, etc.

tiŃ は、直後が低いので、tíŃ となっていると考えられる。§2—1—12および§2—2—3参照。また、tákumukózesaはしばしばtákumukózésaと発音されたが、同じ構造の動詞を用いて確認した結果、前者の如く解釈した。

§2—1—10. 現在継続否定形

§2—1—4の形に対応する否定形は、

ti + 主格接辞 + kyaa + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次の如く表示しうる。再帰接辞の前では、kyaaはkyaとなるようである。

$^{t}S_1$kyaaCV́X (+ VII), $^{t}S_1$kyaaÓX, $^{t}S_1$kyayéX;
tiS$_2$kyaaCV́X (+ VII), tiS$_2$kyaaÓX, tiS$_2$kyayéX.

takyáarya 「彼はもう食べていない」, takyaajúma「彼はもう罵っていない」,
takyaakózesa, takyaabóhoora, takyaapápaaruka, takyaaríisa, takyaarínda,
takyaasíndika, takyaasíimuura, takyaazíngurura, takyaasúureebesa;
takyaakírya 「彼はもうそれを食べていない」,
takyaamújuma「彼はもう彼を罵っていない」, takyaamúkozesa, takyaamúbohoora,
takyaamúriisa, takyaamúrinda, takyaamúsindika, takyaamúsiimuura,
takyaakízingurura, takyaakísuureebesa;
takyayéjuma 「彼はもう自分を罵っていない」, takyayékozesa, takyayébohoora,
takyayériisa, takyayésiimuura;
tibakyáarya 「彼らはもう食べていない」, tibakyaajúma, etc.;
tibakyaakírya, tibakyaamújuma, etc.;
tibakyayéjuma, etc.

§２—１—11.　未来否定形（１）

§２—１—５の形に対応する否定形は、

ti ＋ 主格接辞 ＋ ija ＋ ku ＋ （対格接辞 ＋） 語幹 ＋ a

という構造のものがあり、アクセントは次の如くである。

'S_1ijákuCV́CV́(Ŕ)X (+ IX) / 'S_1ijákuCVRCV́(Ŕ)X (+ II),

'S_1ijákuOCV́(Ŕ)X (+ X), 'S_1ijákweeCV́(Ŕ)X (+ X).

tiS_2ijákuCV́CV́(Ŕ)X (+ IX) / tiS_2ijákuCVRCV́(Ŕ)X (+ II),

tiS_2ijákuOCV́(Ŕ)X (+ X), tiS_2ijákweeCV́(Ŕ)X (+ X).

taijákuryâ「彼は食べない」, taijákujúma 「彼は罵らない」, taijákukózésa,
taijákubóhóora, taijákukáránga, taijákupápááruka, taijákuríisa,
taijákurínda, taijákusindíka, taijákusiimúura, taijákuzingúrura,
taijákusuuréébesa;
taijákukíryâ「彼はそれを食べない」, taijákumújúma 「彼は彼を罵らない」,
taijákumukózesa, taijákumubóhoora, taijákubikáranga, taijákumuríisa,
taijákumurínda, taijákumusíndika, taijákumusíimuura, taijákukizíngurura,
taijákukisúúreebesa;
taijákweéjúma 「彼は自分を罵らない」, taijákweekózesa, taijákweebóhoora,
taijákweeríisa, taijákweesíímuura;
tibaijákuryâ「彼らは食べない」, tibaijákujúma, tibaijákukózésa, etc.;
tibaijákukíryâ, tibaijákumújúma, tibaijákumukózesa, etc.;
tibaijákweéjúma, tibaijákweekózesa, etc.

§２—１—12.　遠未来否定形

§２—１—７の形に対応する否定形は、

ti ＋ 主格接辞 ＋ ri ＋ （対格接辞 ＋）語幹 ＋ a

という構造を有し、アクセントは、次の如く表示しうる。

'$\acute{S}_1$ríX, '$\acute{S}_1$ríOX, '$\acute{S}_1$ryéeX; ti$\acute{S}_2$ríX, ti$\acute{S}_2$ríOX, ti$\acute{S}_2$ryéeX.

tárírya 「彼は食べない」, táríjuma「彼は罵らない」, tárikozesa, táríbohoora,
tárípapaaruka, tárírriisa, tárírinda, tárísindika, tárísiimuura,
tárízingurura, tárísuureebesa;
tárikirya 「彼はそれを食べない」, tárímujuma「彼は彼を罵らない」,

tárímukozesa, tárímubohoora, tárímuriisa, tárímurinda, tárímusindika,
tárímusiimuura, táríkizingurura, táríkisuureebesa;
táryéejuma「彼は自分を罵らない」, táryéekozesa, táryéebohoora, táryéeriisa,
táryéesiimuura;
tibárírya 「彼らは食べない」, tibárijuma, etc.;
tibáríkirya, tibárímujuma, etc.;
tibáryéejuma, etc.;
tindírya「私は食べない」, tindíjuma, tindíkozesa, etc.

tiŃ は、直後が高いので、tiN となっていると考えられる。§2—1—9および§2—2—3参照。

§2－2. 語尾ire を用いる形

次に、語尾としてire を用いる形を見る。

語尾ire は、語幹最後の母音がe/o の場合、ere となり、また、i/e の前で語幹末子音 t はs に、d/r はz に変わる。さらに、語幹+ireの形には次のような規則的例外がある。

(1) 語幹がirによって延長されている場合、それがとれてiireがつく。

(2) 語幹が(u)ur によって延長されている場合、それがとれてwiire がつく。

(3) 語幹がis/es によって延長されている場合、ize/eze がつく。

その他にも規則的例外があり、個別的例外もあるようであるが、詳細は省略する。以下に例としてあげる動詞の語幹+ireの形を示す。アクセントを捨象した形であげる。

okúryâ: riire, okújúma: jumire, okukózésa: kozeseze, okuríisa: riisize,
okurínda: rinzire, okusindíka: sindikire, okusiimúura: siimwiire,
okuzingúrura: zingurwiire.

§2－2－1. 現在完了形

既に行われた行為をあらわす形は、

主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + ire

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

SXV́Ce, SOXV́Ce, SeXV́Ce.

ariíre「彼は食べた」, ajumíre 「彼は罵った」, akozeséze, ariisíze,
arinzíre, asindikíre, asiimwiíre, azingurwiíre;

akiriíre「彼はそれを食べた」, amujumíre 「彼は彼を罵った」, amukozeséze, amuriisíze, amurinzíre, amusindikíre, amusiimwiíre, akizingurwiíre;
ayejumíre 「彼は自分を罵った」, ayekozeséze, ayeriisíze, ayesiimwiíre;
bariíre 「彼らは食べた」, bajumíre, etc.;
bakiriíre, bamujumíre, etc.;
beejumíre, etc.

§2－2－2. 現在完了否定形

§2－2－1の形に対応する否定形は、

ti + 主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + ire

という構造を有する。アクセントは次のように表示しうる。

$^{t}S_1X\acute{V}Ce$, $^{t}S_1OX\acute{V}Ce$, $^{t}S_1eX\acute{V}Ce$; $tiS_2X\acute{V}Ce$, $tiS_2OX\acute{V}Ce$, $tiS_2eX\acute{V}Ce$.

tariíre 「彼は食べなかった」, tajumíre「彼は罵らなかった」, takozeséze, tariisíze, tarinzíre, tasindikíre, tasiimwiíre, tazingurwiíre;
takiriíre 「彼はそれを食べなかった」, tamujumíre「彼は彼を罵らなかった」, tamukozeséze, tamuriisíze, tamurinzíre, tamusindikíre, tamusiimwiíre, takizingurwiíre;
tayejumíre「彼は自分を罵らなかった」, tayekozeséze, tayeriisíze, tayesiimwiíre;
tibariíre, tibajumíre, tibakozeséze, etc.;
tibakiriíre, tibamujumíre, tibamukozeséze, etc.;
tibeejumíre, tibeekozeséze, etc.

§2－2－3. 未然形

ある行為が行われるはずだが、まだ行われていないことをあらわす形は、

ti + 主格接辞 + ka + (対格接辞 +) 語幹 + ire

という構造を有する。アクセントは次のように表示しうる。

$^{t}\acute{S}_1k\acute{a}CV(R)C\acute{V}(\acute{R})X$ (X = Ceなら、$(\acute{R})$ は(R) となる。X = Øなら、直前の$\acute{R}$ はあらわれず、その前の$C\acute{V}$はCVとなり、その前のR があらわれ、そのR は$\acute{R}$ となる。「調整規則XI」と呼ぶ),

$^{t}\acute{S}_1k\acute{a}OC\acute{V}(\acute{R})X$ (X = Ceなら、$(\acute{R})$ は(R) となる。「調整規則XII 」と呼ぶ),

^{1}Ś$_{1}$kéeCV́(Ŕ)X (+ XII);

tiŚ$_{2}$káCV(R)CV́(Ŕ)X (+ XI), tiŚ$_{2}$káOCV́(Ŕ)X (+ XII),

tiŚ$_{2}$kéeCV́(Ŕ)X (+ XII).

tákáriíre 「彼はまだ食べていない」, tákájumíre「彼はまだ罵っていない」,

tákákozéseze, tákáriisíze, tákárinzíre, tákásindíkire, tákásiimwíire,

tákázingúrwiire;

tákákirríire 「彼はまだそれを食べていない」,

tákámujúmire「彼はまだ彼を罵っていない」, tákámukózeseze, tákámurríísize,

tákámurríñzire, tákámusíñdikire, tákámusíímwiire, tákákizíñgurwiire;

tákéejúmire 「彼はまだ自分を罵っていない」, tákéekózeseze, tákéeríísize,

tákéesíímwiire;

tibákáriíre, tibákájumíre, etc.;

tibákákirríire, tibákámujúmire, etc.;

tibákéejúmire, etc.;

tinkáriíre「私はまだ食べていない」, tinkájumíre, etc.

tiŃ は、直後が高いので、tiN となっていると考えられる。§２—１—９および§２—１—12参照。また、tákáriíre, tákájumíre, tákárinzíreの語幹内部の「高」については少し曖昧な発音が録音されているが、何度も録音を聞き直した結果、「高」があると判断した。

§２－３. 語尾irege を用いる形

語幹+iregeは、形の上から見れば、上に見た語幹+ireの形にgeを続けたものである。

§２－３－１. 近過去形

その日に行われた行為をあらわす形は、

主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + irege

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

SXCége, SOXCége, SeXCége.

ariirége「彼は食べた」, ajumirége 「彼は罵った」, akozesezége, ariisizége,

arinzirége, asindikirége, asiimwiirége, azingurwiirége;

akiriirége「彼はそれを食べた」, amujumirége 「彼は彼を罵った」,

amukozesezége, amuriisizége, amurinzirége, amusindikirége, amusiimwiirége, akizingurwiirége;

ayejumirége 「彼は自分を罵った」, ayekozesezége, ayeriisizége, ayesiimwiirége;

bariirége 「彼らは食べた」, bajumirége, etc.;

bakiriirége, bamujumirége, etc.;

beejumirége, etc.

§2－3－2.　近過去否定形

§2－3－1の形に対応する否定形は、

ti + 主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + irege

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$'S_1X\acute{V}C\acute{e}ge$, $'S_1OX\acute{V}C\acute{e}ge$, $'S_1eX\acute{V}C\acute{e}ge$; $tiS_2X\acute{V}C\acute{e}ge$, $tiS_2OX\acute{V}C\acute{e}ge$, $tiS_2eX\acute{V}C\acute{e}ge$.

tarí́rége 「彼は食べなかった」, tajumí́rege「彼は罵らなかった」,

takozesézége, tariisízége, tarinzí́rége, tasindikí́rége, tasiimwií́rége, tazingurwií́rége;

takirií́rége 「彼はそれを食べなかった」,

tamujumí́rége「彼は彼を罵らなかった」, tamukozesézége, tamuriisízége, tamurinzí́rége, tamusindikí́rége, tamusiimwií́rége, takizingurwií́rége;

tayejumí́rége「彼は自分を罵らなかった」, tayekozesézége, tayeriisízége, tayesiimwií́rége;

tibarií́rége, tibajumí́rége, etc.;

tibakirií́rége, tibamujumí́rége, etc.;

tibeejumí́rége, etc.

§2－4.　語尾e を用いる形

語尾e の前では、ire/ere の前のような、語幹末子音の変化はおこらないようである。

§2－4－1.　遠過去否定形

§2－1－1の形に対応する否定形は、

主格接辞 + ta + (対格接辞 +) 語幹 + e

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

StaXŘCe (X = Øなら Ř もØであるが、CeはCê となり、語幹直前の母音が高くなる。「調整規則XIII」と呼ぶ),

StaOXŘCe (+ XIII), SteeOXŘCe (+ XIII).

atáryê「彼は食べなかった」, atajúme 「彼は罵らなかった」, atakozése, atariíse, atariñde, atasindíke, atasiimuúre, atazingurúre;

atakíryê「彼はそれを食べなかった」, atamujúme 「彼は彼を罵らなかった」, atamukozése, atamuriíse, atamuriñde, atamusindíke, atamusiimuúre, atakizingurúre;

ateejúme「彼は自分を罵らなかった」, ateekozése, ateeriíse, ateeriñde, ateesindíke, ateesiimuúre.

§2－4－2. 未来否定形（2）

§2－1－6の形に対応する否定形は、

ti + 主格接辞 + raa + (対格接辞 +) 語幹 + e

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。raa は再帰接辞の前では短くなるようである。

'S_1raaXŘCe (X = Øなら、Ř もØであるが、CeはCê となる。「調整規則XIV 」と呼ぶ),

'S_1raaOXŘCe (+ XIII), 'S_1rayeXŘCe (+ XIII);

tiS_2raaXŘCe (+ XIV), tiS_2raaOXŘCe (+ XIII), tiS_2rayeXŘCe (+ XIII).

taraaryê「彼は食べない」, taraajúme 「彼は罵らない」, taraakozése, taraariíse, taraariñde, taraasindíke, taraasiimuúre, taraazingurúre;

taraakíryê「彼はそれを食べない」, taraamujúme 「彼は彼を罵らない」, taraamukozése, taraamuriíse, taraamuriñde, taraamusindíke, taraamusiimuúre, taraakizingurúre;

tarayejúme「彼は自分を罵らない」, tarayekozése, tarayeriíse, tarayesiimuúre;

tibaraaryê「彼らは食べない」, tibaraajúme, etc.

§2－5. 語尾aga を用いる形

§２－５－１．　遠過去習慣形

過去においてある行為を行う習慣があったことをあらわす形は、

主格接辞 + a + (対格接辞 +) 語幹 + aga

という構造を有し、主格接辞+aの形は、単数１・２・３人称でnya/wa/aである。アクセントは、次のように表示しうる。

SaXága, SaOXága, SayeXága.

aryaága 「彼はよく食べた」, ajumága 「彼はよく罵った」, akozeséga, ariiséga, arindága, asindikága, asiimuurága, azingururága;

akiryaága 「彼はよくそれを食べた」, amujumága 「彼はよく彼を罵った」, amukozeséga, amuriiséga, amurindága, amusindikága, amusiimuurága, akizingururága;

ayejumága 「彼はよく自分を罵った」, ayekozeséga, ayeriiséga, ayesiimuurága;

baaryaága 「彼らはよく食べた」, baajumága, etc.;

baakiryaága, baamujumága, etc.;

baayejumága, etc.

この形によって、過去において進行中だった行為をあらわすことも可能かも知れない。

§２－５－２．　経験否定形

ある行為を行ったことがないことをあらわす形は、

ti + 主格接辞 + ka + (対格接辞 +) 語幹 + aga

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{t}S_1$káXága, $^{t}S_1$káOXága, $^{t}S_1$kéeXága; tiS_2káXága, tiS_2káOXága, tiS_2kéeXága.

takáryaága「彼は食べたことがない」, takájumága「彼は罵ったことがない」, takákozeséga, takáriiséga, takárindága, takásindikága, takásiimuurága, takázingururága;

takákiryaága「彼はそれを食べたことがない」,

takámujumága「彼は彼を罵ったことがない」, takámukozeséga, takámuriiséga, takámurindága, takámusindikága, takámusiimuurága, takákizingururága;

takéejumága 「彼は自分を罵ったことがない」, takéekozeséga, takéeriiséga, takéesiimuurága;

tibakáryaága, tibakájumága, etc.

なお、語尾aga を用いたこの形がどうして経験否定形と呼びうる形になっているのか、明らかでない。

§２－６．　複合形

この言語の「～である」という動詞（いわゆるコピュラ）の活用形は、次のような構造を有し、動詞複合活用形に用いられる場合のアクセントは、その右側に記す通りである。

遠過去形:	主格接辞 + ka + ba	Skaba
近過去形:	主格接辞 + bairege	Sbairegé
未来形:	主格接辞 + ija + ku + ba	Sijakúbá
	主格接辞 + raa + ba	Sraaba
遠未来形:	主格接辞 + ri + ba	Sriba

（Sijakúbáは、こう録音されているが、Sijakubáも可能かも知れない。）

これらのあとに、構造は

ni +　主格接辞 +（対格接辞 +）語幹 + a

（ni+ 主格接辞の単数２・３人称の形は、noo/naa)、

アクセントは

niSXŘCa（ + VI ），niSOXŘCa（ + VI ），niSeXŘCa（ + VI ）

（§２－１－２の形に低いniを前接させたものだが、対格接辞があらわれなくても、調整規則はV でなくVIであることに注意。niturya/nitujumaといった発音でなく、nitúryâ/nitújúmaなのである。）

の形を続けると、「遠過去進行形」、「近過去進行形」、「未来進行形」、「遠未来進行形」となる。なお、今見た形自体は、「～しながら」「～しているのを」といった意味で用いられる。「現在分詞」と呼んでよいものである。

コピュラの活用形に、構造は

主格接辞 + kyaa +（対格接辞 +）語幹 + a、

アクセントは

SkyaaCV́X（ + VII ），SkyaaÓX，SkyayéX

の形を続けると、「遠過去継続形」、「近過去継続形」、「未来継続形」、「遠未来継続形」となる。

コピュラの活用形に、構造は

主格接辞 + ta + ku +（対格接辞 +）語幹 + a、

アクセントは

StákuCV́CV́(Ŕ)X (+ IX) / StákuCVRCV́(Ŕ)X (+ II), StákuOCV́(Ŕ)X (+ X),

StákweeCV́(Ŕ)X (+ X)

の形を続けると、「遠過去進行否定形」、「近過去進行否定形」、「未来進行否定形」、「遠未来進行否定形」となる。なお、今見た形自体は、「～しないで」「～していないのを」といった意味で用いられる。「現在分詞否定形」と呼んでよいものである。

コピュラの活用形に、構造は

主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + ire、

アクセントは

ŚCV́(Ŕ)X (+ XII), ŚOX, SeCV́(Ŕ)X (+ XII)

の形を続けると、「遠過去完了形」、「近過去完了形」、「未来完了形」、「遠未来完了形」となる。なお、今見た形自体は、「完了分詞」と呼んでよいものである。

コピュラの活用形に、構造は

主格接辞 + ta + ka + (対格接辞 +) 語幹 + ire、

アクセントは

StákáCV(R)CV́(Ŕ)X (+ XI), StákáOCV́(Ŕ)X (+ XII), StákéeCV́(Ŕ)X (+ XII)

の形を続けると、「遠過去完了否定形」、「近過去完了否定形」、「未来完了否定形」、「遠未来完了否定形」となる。なお、今見た形自体は、「～しないうちに」といった意味で用いられる。「完了分詞否定形」と呼んでよいものである。

「～進行形」で例をあげる。

akaba naajúma　　「彼は罵っていた」

abairegé naajúma　　「彼は罵っていた」

aijakúbá naajúma　　「彼は罵っている（だろう）」

araaba naajúma　　「彼は罵っている（だろう）」

ariba naajúma　　「彼は罵っている（だろう）」

「遠過去継続形」、「遠過去進行否定形」、「遠過去完了形」、「遠過去完了否定形」の例をあげる。

akaba akyaajúma　　「彼はまだ罵っていた」

akaba atákujúma　　「彼は罵っていなかった」

akaba ájúmire　　「彼はもう罵っていた」

akaba atákájumíre　　「彼はまだ罵っていなかった」

§3. 命令・禁止形

§3－1. 命令形

相手が単数の場合と複数の場合では、命令に用いられる形が異なる。対複数命令形は、あとで見る接続法形複数2人称形を用いるので、ここでは触れない。

相手が単数の場合の命令形は、

（単数1人称対格接辞 +）語幹 + a　　あるいは　　対格接辞 + 語幹 + e

という構造を有する。再帰接辞があらわれる場合は、接続法形を用いるので、ここでは触れない。アクセントは、次のように表示しうる。単数1人称対格接辞は、N であらわす。

XCV́(Ŕ)CV́Ca（X =Øなら、CV́(Ŕ) もØでありうるが、CaはCâとなる。その場合、CV́もØでありうる。「調整規則XV」と呼ぶ）/ XCV́RCa,

NXCV́(Ŕ)CV́Ca（+ XV）/ NXCV́RCa,

OXŔCê（X = Øなら ŔもØであるが、語幹直前の母音が高くなる。「調整規則XVI」と呼ぶ）.

ryâ「食べろ」, júmâ「罵れ」, kózésa, síndíka, papáárúka, zingúrúra,

migiitíríza「押し縮めよ」, ríisa, rínda, bohóora, karánga, siimúura;

njúmâ「私を罵れ」, nkózésa, nsíndíka, ndíisa, ndínda, nsiimúura;

kíryê「それを食べろ」, mujúmê「彼を罵れ」, mukozésê, mubohoórê, bikarangê, muriísê, murindê, musindíkê, musiimuúrê, kizingurúrê.

§3－2. 禁止形

相手に禁止する場合の形は、

主格接辞 + ta +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。主格接辞は、もちろん、2人称のそれである。ただし、この形は、あとでも触れるように、接続法否定形である。

StaXŔCâ（X = Øなら、Ŕ もØであるが、語幹直前の母音が高くなる。「調整規則XVII」と呼ぶ）,

StaOXŔCâ（+ XVII）, SteeXŔCâ（+ XVII）.

otáryâ「食べるな」, otajúmâ「罵るな」, otakozésâ, otabohoórâ, otapapaarúkâ, otariísâ, otarindâ, otasindíkâ, otasiimuúrâ, otazingurúrâ;

otakíryâ「それを食べるな」, otamujúmâ「彼を罵るな」, otamukozésâ,

otamubohoórâ, otamuriísâ, otamurińdâ, otamusindíkâ, otamusiimuúrâ, otakizingurúrâ;

oteejúmâ「自分を罵るな」, oteekozésâ, oteebohoórâ, oteeriísâ, oteerińdâ, oteesiimuúrâ;

mutáryâ 「（君たち）食べるな」, mutajúmâ「罵るな」, etc.

§4. 接続法形

「～が～するように」と訳すと何となく意味の通じる形があり、「接続法」と呼ばれることが多い。ここでは、その形とそれに対応する否定形を見る。

§4—1. 接続法形

肯定の接続法形は、

主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + e

という構造を有し、アクセントは次のように表示しうる。

SXŔCê (+ XVI), SOXŔCê (+ XVI), SeXŔCê (+ XVI).

áryê「彼が食べるように」, ajúmê 「彼が罵るように」, akozésê, abohoórê, ariísê, arińdê, asindíkê, asiimuúrê, azingurúrê;

akíryê「彼がそれを食べるように」, amujúmê 「彼が彼を罵るように」, amukozésê, amubohoórê, amuriísê, amurińdê, amusindíkê, amusiimuúrê, akizingurúrê;

ayejúmê 「彼が自分を罵るように」, ayekozésê, ayebohoórê, ayeriísê, ayerińdê, ayesiimuúrê.

なお、「～しよう」と誘いかける形は、この形の複数１人称形であり、複数の相手に命令する場合や、相手が単数でも「自分を～せよ」という場合には、この形が用いられる。

turińdê 「待とう」

murińdê 「(君たち) 待て」

wesiimuúrê「自分（の体）を拭け」

§4－2. 接続法否定形

否定の接続法形は、§３－２に見た形と同じであるが、禁止の場合は主格接辞が２人称に限定されたのに対し、この場合はそう限定されるわけではない。

batajúmâ「彼らが罵らないように」

§5. 連体修飾形

次に、動詞がうしろから名詞を修飾する時の形のうちの主要なものを見る。

§5—1. 直接修飾形

動詞のあらわす行為の主体が被修飾名詞のあらわすものと一致する場合（「直接修飾」と呼ぼう）をまず見る。

§5—1—1. 遠過去形

§2－1－1の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + a +（対格接辞 +）語幹 + ire

という構造を有する。冒頭母音は、主格接辞の母音がu/i/a のどれであるかによって、o/e/a となる。単数3人称（クラスI ）とクラスV/XII の冒頭母音+ 主格接辞+aの形はaya/eya である。アクセントは次のように表示しうる。冒頭母音はV であらわす。S_2+aでも、対格接辞の前では短いようである。

VS_1aXŔCV́Ce / VS_1aXCV́VCe, VS_1aOXŔCV́Ce / VS_1aOXCV́VCe,

VS_1ayeXŔCV́Ce / VS_1ayeXCV́VCe;

VS_2aaXŔCV́Ce / VS_2aaXCV́VCe, VS_2aOXŔCV́Ce / VS_2aOXCV́VCe,

VS_2ayeXŔCV́Ce / VS_2ayeXCV́VCe.

omúńtu ayaríire 「食べた人」, ～ ayajúmíre「罵った人」, ～ ayakozéséze,

～ ayariísíze, ～ ayarińzíre, ～ ayasindíkíre, ～ ayasiimwíire,

～ ayazingurwíire;

omúńtu ayakiríire 「それを食べた人」, ～ ayamujúmíre「彼を罵った人」,

～ ayamukozéséze, ～ ayamuriísíze, ～ ayamurińzíre, ～ ayamusindíkíre,

～ ayamusiimwíire, ～ ayakizingurwíire;

omúńtu ayayejúmíre「自分を罵った人」, ～ ayayekozéséze, ～ ayayeriísíze,

～ ayayesiimwíire;

abáńtu abaaríire「食べた人々」, ～ abaajúmíre, etc.;

abáńtu abakiríire, ～ abamujúmíre, etc.;

abáńtu abayejúmíre, etc.

§５—１—２．　遠過去習慣形

§２－５－１の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 ＋ 主格接辞 ＋ a ＋（対格接辞 ＋）語幹 ＋ aga

という構造を有する。主格接辞＋ 母音は常に長い。単数３人称（クラスI)とクラスV/XIIの冒頭母音＋ 主格接辞＋aの形は ayaa/eyaaである。アクセントは次のように表示しうる。データが一部で（okúryâおよび長い動詞に関して）不足している。

VSaCV́Xága（ X = Øなら、直後のá はǎ となる。「調整規則XVIII 」と呼ぶ),

VSaÓXága, VSeCV́Xága（ ＋ XVIII).

omúńtu ayaajúmǎga 「よく罵った人」, ～ ayaakózeséga, ～ ayaaríiséga,

～ ayaaríndága;

omúńtu ayaamújumága 「よく彼を罵った人」, ～ ayaamúkozeséga,

～ ayaamúriiséga, ～ ayaamúrindága;

omúńtu ayeejúmǎga 「よく自分を罵った人」, ～ ayeekózeséga,

～ ayeeríiséga;

abáńtu abaajúmǎga, ～ abaakózeséga, etc.;

abáńtu abaamújumága, ～ abaamúkozeséga, etc.;

abáńtu abeejúmǎga, ～ abeekózeséga, etc.

データがそろえば、調整規則XVIII の内容が変化するであろう。また、～CV́Xágaというより、～CV́(Ŕ)Xága で表示すべきものである可能性もある。

§５—１—３．　近過去形

§２－３－１の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 ＋ 主格接辞 ＋（対格接辞 ＋）語幹 ＋ irege

という構造を有する。単数３人称（クラスI ）とクラスV/XII の冒頭母音 ＋主格接辞の形はa/e である。 $^{v}S_1$であらわす。アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$CV(R)CV́XCége（ X =Øなら、CéはCěとなる。X = ØならCV́もØでありうるが、R があらわれ、最初のCVはCV́となりCéはCěとはならない。「調整規則XIX 」と呼ぶ),

$^{v}S_1$OCV́(Ŕ)XCége（ X = Øなら、Ŕ があらわれ、Ŕ はR となる。「調整規則XX」と呼ぶ),

$^{v}S_1$yeCV́(Ŕ)XCége（ ＋ XX);

VS_2CV́(Ŕ)XCége（ ＋ XX), VS_2ÓXCége, VS_2eCV́(Ŕ)XCége（ ＋ XX).

omúńtu aríirége 「食べた人」, ～ ajumírège「罵った人」, ～ akozésezége,
～ ariisízège, ～ arinzírège, ～ asindíkirége, ～ asiimwíirége,
～ azingúrwiirége;
omúńtu akiríirége 「それを食べた人」, ～ amujúmirége「彼を罵った人」,
～ amukózesezége, ～ amuríísizége, ～ amuríńzirége, ～ amusíńdikirége,
～ amusíímwiirége, ～ akizíńgurwiirége;
omúńtu ayejúmirége「自分を罵った人々」, ～ ayekózesezége, ～ ayeríísizége,
～ ayesíímwiirége;
abáńtu abaríirége 「食べた人々」, ～ abajúmirége「罵った人々」,
～ abakózesezége, ～ abaríísizége, ～ abaríńzirége, ～ abasíńdikirége,
～ abasíímwiirége, ～ abazíńgurwiirége;
abáńtu abakíriirége 「それを食べた人々」,
～ abamújumirége「彼を罵った人々」, ～ abamúkozesezége, ～ abamúriisizége,
～ abamúrinzirége, ～ abamúsindikirége, ～ abamúsiimwiirége,
～ abakízingurwiirége;
abáńtu abeejúmirége 「自分を罵った人々」, ～ abeekózesezége,
～ abeeríísizége, ～ abeesíímwiirége.

§5—1—4. 現在完了形

§2—2—1に見た形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + ire

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。データが一部で (okúryâに関して) 不足している。

$^{v}S_1CV(R)C\acute{V}(\acute{R})X$ (X = Øなら、(Ŕ) は(R) となる。「調整規則XXI 」と呼ぶ),
$^{v}S_1OC\acute{V}(\acute{R})X$ (+ XII), $^{v}S_1yeC\acute{V}(\acute{R})X$ (+ XII);
$VS_2C\acute{V}(\acute{R})X$ (+ XII), $VS_2\acute{O}X$, $VS_2eC\acute{V}(\acute{R})X$ (+ XII).

omúńtu ajumíre「罵った人」, ～ akozéseze, ～ ariisíze, ～ arinzíre,
～ asindíkire, ～ asiimwíire, ～ azingúrwiire;
omúńtu akiríire 「それを食べた人」, ～ amujúmire「彼を罵った人」,
～ amukózeseze, ～ amuríísize, ～ amuríńzire, ～ amusíńdikire,
～ amusíímwiire, ～ akizíńgurwiire;

omúńtu ayejúmire「自分を罵った人」, ～ ayekózeseze, ～ ayerílísize,
～ ayesílímwiire;
abáńtu abaríire 「食べた人々」, ～ abajúmire「罵った人々」, ～ abakózeseze,
～ abarílísize, ～ abaríńzire, ～ abasíńdikire, ～ abasílímwiire,
～ abazíńgurwiire;
abáńtu abakíriire 「それを食べた人々」, ～ abamújumire「彼を罵った人々」,
～ abamúkozeseze, ～ abamúriisize, ～ abamúrinzire, ～ abamúsindikire,
～ abamúsiimwiire, ～ abakízingurwiire;
abáńtu abeejúmire 「自分を罵った人々」, ～ abeekózeseze, ～ abeerílísize,
～ abeesílímwiire.

§5－1－5. 現在形

§2—1—2に見た形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。データが一部で (okúryâと okújúma に関して) 不足している。

$^{v}S_1C\acute{V}C\acute{V}(\acute{R})X$ (+ IX) / $^{v}S_1CVRC\acute{V}(\acute{R})X$ (+ II), $^{v}S_1OC\acute{V}(\acute{R})X$ (+ X),
$^{v}S_1yeC\acute{V}(\acute{R})X$ (+ X);
$VS_2C\acute{V}(\acute{R})X$ (X = Ca なら、$(\acute{R})$ は(R) となる。「調整規則XXII」と呼ぶ),
$VS_2\acute{O}X$, $VS_2eC\acute{V}(\acute{R})X$ (+ XXII).

omúńtu akózésa「雇う人」, ～ aríisa, ～ arínda, ～ asindíka,
～ asiimúura, ～ azingúrura;
omúńtu akíryâ 「それを食べる人」, ～ amújúma「彼を罵る人」, ～ amukózesa,
～ amuríisa, ～ amurínda, ～ amusíńdika, ～ amusílímuura,
～ akizíńgurura;
omúńtu ayéjúma「自分を罵る人」, ～ ayekózesa, ～ ayeríisa, ～ ayesílímuura;
abáńtu abajúma「罵る人々」, ～ abakózesa, ～ abaríisa, ～ abaríńda,
～ abasíńdika, ～ abasílímuura, ～ abazíńgurura;
abáńtu abakírya 「それを食べる人々」, ～ abamújuma「彼を罵る人々」,
～ abamúkozesa, ～ abamúriisa, ～ abamúrinda, ～ abamúsindika,
～ abamúsiimuura, ～ abakízingurura;

abáńtu abeejúma 「自分を罵る人々」, ～ abeekózesa, ～ abeeríisa,
～ abeesíímuura.

データがそろえば、調整規則XXIIの内容が変化するであろう。また、IXが完全に適用されるかどうかが分かる。

§5—1—6. 現在進行形

§2－1－3の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ku + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造であり、アクセントは、次のように表示しうる。

^{v}S$_1$kuCVCV(R)X (+ IX) / ^{v}S$_1$kuCVRCV(R)X (+ II), ^{v}S$_1$kuOCV(R)X (+ X),
^{v}S$_1$kweeCV(R)X (+ X);
VS$_2$kuCVCV(R)X (+ IX) / VS$_2$kuCVRCV(R)X (+ II), VS$_2$kuOCV(R)X (+ X),
VS$_2$kweeCV(R)X (+ X).

omúńtu ákuryâ 「食べている人」, ～ ákujúma「罵っている人」, ～ ákukózesa,
～ ákuríisa, ～ ákurínda, ～ ákusindíka, ～ ákusiimúura, ～ ákuzingúrura;
omúńtu ákukíryâ 「それを食べている人」, ～ ákumújúma「彼を罵っている人」,
～ ákumuríisa, ～ ákumurínda, ～ ákumusíńdika, ～ ákumusíímuura,
～ ákukizíńgurura;
omúńtu ákweejúma「自分を罵っている人」, ～ ákweekózesa, ～ ákweeríisa,
～ ákweesíímuura;
abáńtu abákuryâ, ～ abákujúma, ～ abákukózesa, etc.;
abáńtu abákukíryâ, ～ abákumújúma, ～ abákumukózesa, etc.;
abáńtu abákweejúma, ～ abákweekózesa, etc.

§5—1—7. 現在継続形

§2－1－4の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + kyaa + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

^{v}S$_1$kyaaCVX (+ VII), ^{v}S$_1$kyaaOX, ^{v}S$_1$kyayeX;
VS$_2$kyaaCVX (+ VII), VS$_2$kyaaOX, VS$_2$kyayeX.

omúńtu akyáarya 「まだ食べている人」, ～ akyaajúma「まだ罵っている人」,

～ akyaakózesa, ～ akyaaríisa, ～ akyaarínda, ～ akyaasíndika,
～ akyaasíimuura, ～ akyaazíngurura;
omúńtu akyaakírya 「まだそれを食べている人」,
～ akyaamújuma「まだ彼を罵っている人」, ～ akyaamúkozesa, ～ akyaamúriisa,
～ akyaamúrinda, ～ akyaamúsindika, ～ akyaamúsiimuura,
～ akyaakízingurura;
omúńtu akyayéjuma 「まだ自分を罵っている人」, ～ akyayékozesa,
～ akyayériisa, ～ akyayésiimuura;
abáńtu abakyáarya, ～ abakyaajúma, etc.

§5—1—8. 未来形（1）

§2－1－5の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + kwiija + ku +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}\acute{S}_1$kwiija kuCV́CV́(Ŕ)X (+ I) / $^{v}\acute{S}_1$kwiija kuCVRCV́(Ŕ)X (+ II),
$^{v}\acute{S}_1$kwiija kuOCV́(Ŕ)X (+ III), $^{v}\acute{S}_1$kwiija kweeCV́(Ŕ)X (+ III);
V$\acute{S}_2$kwiija kuCV́CV́(Ŕ)X (+ I) / V$\acute{S}_2$kwiija kuCVRCV́(Ŕ)X (+ II),
V$\acute{S}_2$kwiija kuOCV́(Ŕ)X (+ III), V$\acute{S}_2$kwiija kweeCV́(Ŕ)X (+ III).
omúńtu ákwiija kúryâ「食べる人」, ～ ákwiija kújúma 「罵る人」,
～ ákwiija kukózésa, ～ ákwiija kuríisa, ～ ákwiija kurínda,
～ ákwiija kusindíka, ～ ákwiija kusiimúura, ～ ákwiija kuzingúrura;
omúńtu ákwiija kúkírya「食べる人」, ～ ákwiija kumújúma 「彼を罵る人」,
～ ákwiija kumukózesa, ～ ákwiija kumuríisa, ～ ákwiija kumurínda,
～ ákwiija kumusíńdika, ～ ákwiija kumusíímuura, ～ ákwiija kukizíńgurura;
omúńtu ákwiija kweéjúma 「自分を罵る人」, ～ ákwiija kweekózesa,
～ ákwiija kweeríisa, ～ ákwiija kweesíímuura;
abáńtu abákwiija kúryâ, etc.

§5—1—9. 未来形（2）

§2－1－6の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + raa +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。データが一部で（okúryâに関して）不足している。

$^{v}S_1$raaCV́(Ŕ)X (+ XXII), $^{v}S_1$raaÓX, $^{v}S_1$rayéX;

VS_2raaCV́(Ŕ)X (+ XXII), VS_2raaÓX, VS_2rayéX.

omúntu araajúma 「罵る人」, ～ araakózesa, ～ araaríisa, ～ araarínda,

～ araasíndika, ～ araasíímuura, ～ araazíngurura;

omúntu araakírya「それを食べる人」, ～ araamújuma 「彼を罵る人」,

～ araamúkozesa, ～ araamúriisa, ～ araamúrinda, ～ araamúsindika,

～ araamúsiimuura, ～ araakízingurura;

omúntu arayéjuma「自分を罵る人」, ～ arayékozesa, ～ arayériisa,

～ arayésiimuura;

abántu abaraajúma, etc.

データがそろえば、調整規則XXIIでよいかどうかが分かる。

§5－1－10.　遠未来形

§2－1－7の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ri + （対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。データが一部で（okúryâに関して）不足している。

$^{v}S_1$riCV́(Ŕ)X (+ XXII), $^{v}S_1$riÓX, $^{v}S_1$ryeeCV́(Ŕ)X (+ XXII);

VS_2ríX, VS_2ríOX,

VS_2ryééX (X = Caなら直前のé はe となる。「調整規則XXIII 」と呼ぶ).

omúntu arijúma「罵る人」, ～ arikózesa, ～ aririisa, ～ arirínda,

～ arisíndika, ～ arisíímuura, ～ arizíngurura;

omúntu arikírya 「それを食べる人」, ～ arimújuma「彼を罵る人」,

～ arimúkozesa, ～ arimúriisa, ～ arimúrinda, ～ arimúsindika,

～ arimúsiimuura, ～ arikízingurura;

omúntu aryeejúma「彼を罵る人」, ～ aryeekózesa, ～ aryeeríisa,

～ aryeesíímuura;

abántu abaríjuma, ～ abaríkozesa, ～ abaríriisa, ～ abaríndinda,

～ abaríndika, ～ abaríindika, ～ abaríiimuura, ～ abarízingurura;

abáńtu abaríkirya, ～ abarímujuma, ～ abarímukozesa, ～ abarímuriisa,
～ abarímurinda, ～ abarímusindika, ～ abarímusiimuura,
～ abaríkizingurura;
abáńtu abaryéejuma, ～ abaryéekozesa, ～ abaryéériisa, ～ abaryéésiimuura;
ekíńtu ekiryéerya 「自分を食べる物」.

§５—１—11. 遠過去否定形

§５—１́—１の形に対応する否定形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ta + a + (対格接辞 +) 語幹 + ire

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$taaXŔCV́Ce / $^{v}S_1$taaXCV́VCe, $^{v}S_1$taaOXŔCV́Ce / $^{v}S_1$taaOXCV́VCe,
$^{v}S_1$teeXŔCV́Ce / $^{v}S_1$teeXCV́VCe;
VS_2taaXŔCV́Ce / VS_2taaXCV́VCe, VS_2taaOXŔCV́Ce / VS_2taaOXCV́VCe,
VS_2teeXŔCV́Ce / VS_2teeXCV́VCe.

omúńtu ataaríire「食べなかった人」, ～ ataajúmíre 「罵らなかった人」,
～ ataakozéséze, ～ ataaríísíze, ～ ataaríńzíre, ～ ataasindíkíre,
～ ataasiimwíire, ～ ataazingurwíire;
omúńtu ataakiríire「それを食べなかった人」,
～ ataamujúmíre 「彼を罵らなかった人」, ～ ataamukozéséze,
～ ataamuríísíze, ～ ataamuríńzíre, ～ ataamusindíkíre, ～ ataamusiimwíire,
～ ataakizingurwíire;
omúńtu ateejúmíre 「自分を罵らなかった人」, ～ ateeríísíze, ～ ateekozéséze,
～ ateesiimwíire;
abáńtu abataaríire, ～ abataajúmíre, ～ abataakozéséze, etc.

§５—１—12. 遠過去経験否定形

§２—５—２の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ta + ka + (対格接辞 +) 語幹 + aga

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$tákáXága, $^{v}S_1$tákáOXága, $^{v}S_1$tákéeXága;
VS_2tákáXága, VS_2tákáOXága, VS_2tákéeXága.

omúńtu atákáryaága「食べたことがない人」,
～ atákájumága「罵ったことがない人」, ～ atákákozeséga, ～ atákáriiséga,
～ atákárindága, ～ atákásindikága, ～ atákásiimuurága,
～ atákázingururága;
omúńtu atákákiryaága「それを食べたことがない人」,
～ atákámujumága「彼を罵ったことがない人」, ～ atákámukozeséga,
～ atákámuriiséga, ～ atákámurindága, ～ atákámusindikága,
～ atákámusiimuurága, ～ atákákizingururága;
omúńtu atákéejumága 「自分を罵ったことがない人」, ～ atákéekozeséga,
～ atákéeriiséga, ～ atákéesiimuurága;
abáńtu abatákáryaága, etc.

§5—1—13. 近過去否定形

§5—1—3の形に対応する否定形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ta + (対格接辞 +) 語幹 + irege

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$taXV́Cége, $^{v}S_1$taOXV́Cége, $^{v}S_1$teeXV́Cége;
VS_2taXV́Cége, VS_2taOXV́Cége, VS_2teeXV́Cége.

omúńtu atariírége 「食べなかった人」, ～ atajumírége「罵らなかった人」,
～ atakozesézége, ～ atariisízége, ～ atarinzírége, ～ atasindikírége,
～ atasiimwiírége, ～ atazingurwiírége;
omúńtu atakiriírége 「それを食べなかった人」,
～ atamujumírége「彼を罵らなかった人」, ～ atamukozesézége,
～ atamuriisízége, ～ atamurinzírége, ～ atamusindikírége,
～ atamusiimwiírége, ～ atakizingurwiírége;
omúńtu ateejumírége 「自分を罵らなかった人」, ～ ateekozesézége,
～ ateeriisízége, ～ ateesiimwiírége;
abáńtu abatariírége, etc.

§5—1—14. 現在完了否定形

§5—1—4の形に対応する否定形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ta + (対格接辞 +) 語幹 + ire

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$taXV́Ce, $^{v}S_1$taOXV́Ce, $^{v}S_1$teeXV́Ce; VS_2taXV́Ce, VS_2taOXV́Ce, VS_2teeXV́Ce.

omúńtu atariíre 「食べなかった人」, ～ atajumíre「罵らなかった人」,

～ atakozeséze, ～ atariisíze, ～ atarinzíre, ～ atasindikíre,

～ atasiimwiíre, ～ atazingurwiíre;

omúńtu atakiriíre 「それを食べなかった人」,

～ atamujumíre「彼を罵らなかった人」, ～ atamukozeséze,

～ atamuriisíze, ～ atamurinzíre, ～ atamusindikíre, ～ atamusiimwiíre,

～ atakizingurwiíre;

omúńtu ateejumíre 「自分を罵らなかった人」, ～ ateekozeséze,

～ ateeriisíze, ～ ateesiimwiíre;

abáńtu abatariíre, etc.

§ 5—1—15. 未然形

§ 2—2—3の形に対応する直接修飾形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ta + ka + (対格接辞 +) 語幹 + ire

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$tákáCV(R)CV́(Ŕ)X (+ XI), $^{v}S_1$tákáOCV́(Ŕ)X (+ XII),

$^{v}S_1$tákéeCV́(Ŕ)X (+ XII);

VS_2tákáCV(R)CV́(Ŕ)X (+ XI), VS_2tákáOCV́(Ŕ)X (+ XII),

VS_2tákéeCV́(Ŕ)X (+ XII).

omúńtu atákáriíre 「まだ食べていない人」,

～ atákájumíre「まだ罵っていない人」, ～ atákákozéseze, ～ atákáriisíze,

～ atákárinzíre, ～ atákásindíkire, ～ atákásiimwíire,

～ atákázingúrwiire;

omúńtu atákákiríire 「まだそれを食べていない人」,

～ atákámujúmire「まだ彼を罵っていない人」, ～ atákámukózeseze,

～ atákámuríísize, ～ atákámuríńzire, ～ atákámusíńdikire,

～ atákámusíímwiire, ～ atákákizíńgurwiire;

omúńtu atákéejúmire 「まだ自分を罵っていない人」, ～ atákéekózeseze,

～ atákéerí́ísize, ～ atákéesí́ímwiire;

abáńtu abatákáriíre, ～ abatákájumíre, ～ abatákákozéseze, etc.

§５－１－16.　現在否定形

§５－１－５の形に対応する否定形は、

冒頭母音 ＋ 主格接辞 ＋ ta ＋ （対格接辞 ＋）語幹 ＋ a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$taXŘCa (＋ VI), $^{v}S_1$taOXŘCa (＋ VI), $^{v}S_1$teeXŘCa (＋ VI);

VS_2taXŘCa (＋ VI), VS_2taOXŘCa (＋ VI), VS_2teeXŘCa (＋ VI).

omúńtu atáryâ 「食べない人」, ～ atajúma「罵らない人」, ～ atakozésa,

～ atariísa, ～ atariída, ～ atasindíka, ～ atasiimuúra, ～ atazingurúra;

omúńtu atakíryâ 「それを食べない人」, ～ atamujúma「彼を罵らない人」,

～ atamukozésa, ～ atamuriísa, ～ atamuriída, ～ atamusindíka,

～ atamusiimuúra, ～ atakizingurúra;

omúńtu ateejúma 「自分を罵らない人」, ～ ateekozésa, ～ ateeriísa,

～ ateesiimuúra;

abáńtu abatáryâ, ～ abatajúma, ～ abatakozésa, etc.

§５－１－17.　現在進行否定形

§５－１－６の形に対応する否定形は、

冒頭母音 ＋ 主格接辞 ＋ taa ＋ ku ＋ （対格接辞 ＋）語幹 ＋ a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$táákuCV́CV́(Ř)X (＋ IX) / $^{v}S_1$táákuCVRCV́(Ř)X (＋ II),

$^{v}S_1$táákuOCV́(Ř)X (＋ X), $^{v}S_1$táákweeCV́(Ř)X (＋ X);

VS_2táákuCV́CV́(Ř)X (＋ IX) / VS_2táákuCVRCV́(Ř)X (＋ II),

VS_2táákuOCV́(Ř)X (＋ X), VS_2táákweeCV́(Ř)X (＋ X).

omúńtu atáákuryâ「食べていない人」, ～ atáákujúma 「罵っていない人」,

～ atáákukózésa, ～ atáákuríisa, ～ atáákurínda, ～ atáákusindíka,

～ atáákusiimúura, ～ atáákuzingúrura;

omúńtu atáákukíryâ「それを食べていない人」,

～ atáákumújúma 「彼を罵っていない人」, ～ atáákumukózesa,

～ atáákumuríisa, ～ atáákumurínda, ～ atáákumusíndika, ～ atáákumusíímuura,
～ atáákukizíngurura;
omúntu atáákweéjúma 「自分を罵っていない人」, ～ atáákweekózesa,
～ atáákweeríisa, ～ atáákweesíímuura;
abántu abatáákuryâ, ～ abatáákujúma, etc.

§5—1—18. 現在継続否定形

§5－1－7の形に対応する否定形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ta + kyaa + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$takyaaCV́X (+ VI), $^{v}S_1$takyaaÓX, $^{v}S_1$takyayéX;
VS_2takyaaCV́X (+ VI), VS_2takyaaÓX, VS_2takyayéX.
omúntu atakyáarya 「もう食べていない人」,
～ atakyaajúma「もう罵っていない人」, ～ atakyaakózesa, ～ atakyaaríisa,
～ atakyaarínda, ～ atakyaasíndika, ～ atakyaasíimuura,
～ atakyaazíngurura;
omúntu atakyaakírya 「もうそれを食べていない人」,
～ atakyaamújuma「もう彼を罵っていない人」, ～ atakyaamúkozesa,
～ atakyaamúriisa, ～ atakyaamúrinda, ～ atakyaamúsindika,
～ atakyaamúsiimuura, ～ atakyaakízingurura;
omúntu atakyayéjuma 「もう自分を罵っていない人」, ～ atakyayékozesa,
～ atakyayériisa, ～ atakyayésiimuura;
abántu abatakyáarya, ～ abatakyaajúma, etc.

§5—1—19. 未来否定形

§5－1－9の形に対応する否定形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + taa + (対格接辞 +) 語幹 + e

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。データが一部で (okúryâに関して) 不足している。

$^{v}S_1$taaXŘCe, $^{v}S_1$taaOXŘCe, $^{v}S_1$teeXŘCe; VS_2taaXŘCe, VS_2taaOXŘCe, VS_2teeXŘCe.
omúntu ataajúme 「罵らない人」, ～ ataakozése, ～ ataaríise, ～ ataaríinde,

～ ataasindíke, ～ ataasiimuúre, ～ ataazingurúre;
omúntu ataamujúme 「彼を罵らない人」, ～ ataamukozése, ～ ataamuriíse,
～ ataamuriínde, ～ ataamusindíke, ～ ataamusiimuúre, ataakizingurúre;
omúntu ateejúme 「自分を罵らない人」, ～ ateekozése, ～ ateeriíse,
～ ateesiimuúre;
abáántu abataajúme, ～ abataakozése, etc.

§5—1—20. 遠未来否定形

§5－1－10の形に対応する否定形は、

冒頭母音 + 主格接辞 + ta + ri + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有し、アクセントは、次のように表示しうる。

$^{v}S_1$tárí X, $^{v}S_1$tárí OX, $^{v}S_1$táryéé X (+ XXIII);
VS_2tárí X, VS_2tárí OX, VS_2táryéé X (+ XXIII).
omúntu atárírya 「食べない人」, ～ atáríjuma「罵らない人」, ～ atáríkozesa,
～ atáríriisa, ～ atárírinda, ～ atárísindika, ～ atárísiimuura,
～ atárízingurura;
omúntu atáríkirya 「それを食べない人」, ～ atárímujuma「彼を罵らない人」,
～ atárímukozesa, ～ atárímuriisa, ～ atárímurinda, ～ atárímusindika,
～ atárímusiimuura, ～ atáríkizingurura;
omúntu atáryéejuma「自分を罵らない人」, ～ atáryéékozesa, ～ atáryéériisa,
～ atáryéésiimuura;
abáántu abatárírya, etc.;
ekíintu ekitáryéerya 「自分を食べない物」.

§5—2. 間接修飾形

次に、動詞のあらわす行為の主体が被修飾名詞のあらわすものと一致しない場合（「間接修飾」と呼ぼう）を見ることにする。なお、被修飾名詞と動詞の間に、関係代名詞が立つのが普通であり、その形は被修飾名詞の属するクラスに対応して、次の如くである。

I o(w)u, II ogu, III eri, IV eki, V eyi, VI oru, VII aka, VIII obu,
IX oku, X otu, XI aba, XII egi, XIII aga, XIV ebi, XV ezi, XVI obu.

動詞間接修飾形は、冒頭母音があらわれない点が異なるだけで構造は直接修飾形と同じ

であるが、アクセントは，直接修飾形と同じもの、直説法形と同じもの、どちらとも異なるものがある。なお、当然のことだが、動詞間接修飾形の主格接辞の場合は、被修飾名詞に呼応するのでなくて、行為の主体に対応する。例では、被修飾名詞 émbwâ「犬」、動詞 okuréeta「連れてくる」で示すことにする。表中「直接修飾形に同じ」というのは、冒頭母音があらわれないだけで構造もアクセントも直接修飾形に等しいことを示す。

遠過去形　　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi yareésére 「彼が連れてきた犬」

embwá eyi baareésére「彼らが連れてきた犬」　　cf. §5－1－1.

遠過去習慣形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi yaaréetága「彼がよく連れてきた犬」　　cf. §5－1－2.

近過去形　　SXV́Cége, SOXV́Cége, SeXV́Cége.

例: embwá eyi areesérége「彼が連れてきた犬」

現在完了形　　SXV́Ce, SOXV́Ce, SeXV́Ce.

例: embwá eyi areesére「彼が連れてきた犬」　　cf. §2－2－1.

現在形　　SXŘCa (+ V), SOXŘCa (+ VI), SeXŘCa (+ VI)

例: embwá eyi areéta「彼が連れてくる犬」　　cf. §2－1－2.

現在進行形　　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi ákuréeta「彼が連れてきている犬」　　cf. §5－1－6.

現在継続形　　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi akyaaréeta 「彼がまだ連れてきている犬」　cf. §5－1－7.

未来形（1）　　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi ákwiija kuréeta「彼が連れてくる犬」　　cf. §5－1－8.

未来形（2）　　SraaXŘCa (+ VIII), SraaOXŘCa (+ VI), SrayeXŘCa (+ VI).

例: embwá eyi araareéta 「彼が連れてくる犬」　　cf. §2－1－6.

遠未来形　　SriXŘCa (+ VI), SriOXŘCa (+ VI), SryeeXŘCa (+ VI).

例: embwá eyi arireéta「彼が連れてくる犬」　　cf. §2－1－7.

遠過去否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi ataareésére 「彼が連れてこなかった犬」　・cf. §5－1－11.

遠過去経験否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atákáreetága「彼が連れてきたことがない犬」

cf. §5—1—12.

近過去否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atareesérége「彼が連れてこなかった犬」　cf. §5—1—13.

現在完了否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atareesére「彼が連れてこなかった犬」　cf. §5—1—14.

未然形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atákáreesére「彼がまだ連れてきていない犬」

cf. §5—1—15.

現在否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atareéta「彼が連れてこない犬」　cf. §5－1－16.

現在進行否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atáákuréeta 「彼が連れてきていない犬」　cf. §5—1—17.

現在継続否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atakyaaréeta「彼がもう連れてきていない犬」cf. §5—1—18.

未来否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi ataareéte 「彼が連れてこない犬」　cf. §5—1—19.

遠未来否定形　直接修飾形に同じ

例: embwá eyi atárireeta「彼が連れてこない犬」　cf. §5—1—20.

§6.　その他の形

§6－1.　継起過去形

「（～した。そして）～した」ということをあらわす形があり、

主格接辞 + a +（対格接辞 +）語幹 + a

という構造を有する。主格接辞+aの形は、単数1～3人称でnyaa/waa/yaaであるが、あらゆる場合に再帰接辞の前で短くなる（と解釈する）。アクセントは、次のように表示しうる。

ŚáCV́X（ X = Øなら、CV́はCVとなり、Śáは Śaとなる。「調整規則XXIV」と呼ぶ」,

ŚáÓX, Śáyéx.

twáarya 「そして私たちは食べた」, twáájúma「そして私たちは罵った」,

twáákózesa, twáábóhoora, twáásíimuura;

twáákírya 「そして私たちはそれを食べた」,

twáámújuma「そして私たちは彼を罵った」, twáámúkozesa, twáámúbohoora, twáámúsiimuura;

twáyéjuma 「そして私たちは自分を罵った」, twáyékozesa, twáyébohoora, twáyesiimuura.

§6－2. 継起過去否定形

「（～した。そして）～しなかった」ということをあらわす形があり、

ti + 主格接辞 + a + (対格接辞 +) 語幹 + a

という構造を有する。アクセントは、次のように表示しうる。

tiŚáCV́X (+ XXIV), tiŚáÓX, tiŚáyéX.

titwáarya 「そして私たちは食べなかった」,

titwáájúma「そして私たちは罵らなかった」, titwáákózesa, titwáábóhoora, titwáásiimuura;

titwáákírya 「そして私たちはそれを食べなかった」,

titwáámújuma「そして私たちは彼を罵らなかっった」, titwáámúkozesa, titwáámúbohoora, titwáámúsiimuura;

titwáyéjuma 「そして私たちは自分を罵らなかった」, titwáyékozesa, titwáyébohoora, titwáyésiimuura.

§7. 若干の補遺

§7－1. 単数1人称主格・対格接辞のN

N は、多くの子音の前では, 子音前鼻音であらわれるが、N + r はndとなり、N + h はmpとなる。ただし、子音前鼻音は、語頭では発音されないこともあるようである。N + 母音はny +長母音となる。。

以下に、主格接辞の例をあげておく。

njuma	「私は罵る」	(< okújúma)
ndéeta	「私は持ってくる」	(< okuréeta)
mpa	「私は与える」	(< okúhâ)
nyaaníkâ	「私は干す」	(< okwaaníka < oku-ániika)

(以上、§2－1－2参照)

§7－2.　母音はじまり語幹

語幹が母音ではじまる場合のデータは不十分であるが、分かっている点を述べる。

母音はじまり語幹の最初の母音は、（§7－1で見た単数1人称主格・対格接辞を除いて）主格接辞・対格接辞・CVからなるその他の接辞がある場合、Ci/Cu+V はCyVV/CwVV(ただし、Ci+iはCii 、Cu+uはCuu)となり、Ca+VはCVV(ただし、Ca+iはCai)となる。また、その主格接辞が母音だけであると（つまり、S_1の場合）その間にy がはいる。

アクセントは、CV́ + V́はCV́V́ に、CV́ + VはCV́V に、CV + V́はCVV́ に、CV + VはCVV になると考えられるが、CV́V/CV́V́ は、あとに低いCVのみが続くとCV́V に、それより大きい低いものが続くとCV́V́ になると考えられる。（この点は、CV́Ṹ についてもいえる。）

okwéebwa「忘れる」（＜ okwéébwa ＜ okú-ébwa. cf. okújúma. ）

次に、現在形で例をあげる。アクセントは、§2－1－2に見たように、SXŔCa であるはずである。

ayétâ（＜ a-eta ）「彼は呼ぶ」, tweétâ「私たちは～」, beétâ 「彼らは～」

ayaníkâ（＜ a-aníka ）「彼は干す」, twaaníkâ「私たちは～」,

baaníkâ 「彼らは～」

baimúkâ 「彼らは起き上がる」

このアクセント((C)V(y)V́Câ, (C)V(y)VCV́Câ)については、どうしてこうなるのか（特に、どうして末尾が下降調なのか）、データ不足のためよく分からない。

§7－3.　二重対格接辞

この言語では、対格接辞が2つあらわれることが可能である。前に立つほうをO_1、後に立つほうをO_2であらわすと、O_1は行為の直接の対象を示し、O_2はその対象が向かう対象を示す。

akakímpa（＜ aka-kí-Ń-pa ）　「彼はそれを私に与えた」.

O_1には次のような制限があるようである。

(1) 単数1人称対格接辞は、O_1にはなりえない。

(2) 複数1人称対格接辞は、O_2が単数3人称対格接辞の場合、O_1にはなりえない。

アクセントは、かなりのブレが認められるが、次の如くであると解釈される。O が1つだけの場合を基準にし、動詞 okuréeta 「持ってくる」とokureetéra「～に持ってくる」を例に用いて示す。

(a)　Oが低く、次も低い場合:　O_1O_2

turaakikureetéra「私たちはそれをあなたに持ってくる」

cf. turaakireéta 「私たちはそれを持ってくる」 （§２－１－６）

(b) Oが低く、次の１音節が高い場合: $\acute{O}_1\acute{O}_2$となり、次の音節が低くなる。

tukakíkúreetera 「私たちはそれをあなたに持ってきた」

cf. tukakireéta 「私たちはそれを持ってきた」 （§２－１－１）

(c) Oが高く、次が低い場合: $\acute{O}_1O_2$

tukyaakíkureetera 「私たちはまだそれをあなたに持ってきている」

cf. tukyaakíreeta 「私たちはまだそれを持ってきている」

（§２－１－４）

なお、最初の例がakakímpaでないのは、CV́Ŕ はあとに低いCVしか続かないとCV́R になるというこの言語の一般的規則に従ったものであろう。§７－２参照。

§７－４. 目的語が続く場合のアクセント

動詞活用形に目的語が続く場合、次のようなアクセント変化が生じる。アクセント表示が特定の母音を用いてなされている形の場合、母音はすべてV/R と読み替えてほしい。

(1) アクセントが～CV́(Ŕ)XでX がCVのため(Ŕ) が(R) になっている場合、目的語が続くと(Ŕ) は(R) であらわれる。

akurínda ～「彼は～を待っている」. cf. akurínda. （§２－１－３）

(2) アクセントが～XŔCV(w)の場合、目的語が続くと～XCV́ となる。

araarindá ～「彼は～を待つ」. cf. araarínda. （§２－１－６）

otakozesá ～「～を雇うな」. cf. otakozésâ. （§３－２）

(3) 主格接辞と（対格接辞+)語幹の間に何もないか、kaしかない肯定形は、目的語が続くと一般に低く平らとなる。

akakozesa ～「彼は～を雇った」. cf. akakózésa.

akatureetera ～「彼は私たちに～を持ってきた」. cf. akaturéétera.

（§２－１－１）

akozesa ～「彼は～を雇う」. cf. akozésa.

atureetera ～「彼は私たちに～を持ってくる」. cf. atureetéra.

（§２－１－２）

akozeseze ～「彼は～を雇った」. cf. akozeséze. （§２－２－１）

アクセントが～XŔCV́CVのものについては、調査もれである。変化しないのではないかと

考えられる。

おわりに

以上の分析は、今回の調査で収集したデータに基づく、現時点でできる限りの分析である。なお、本論文のように子音前鼻音を調素（「高」「低」など）の担い手と考えるのではなく、子音前鼻音の前の母音を長いとし、長母音を調素2つの担い手と考えて記述することも可能であり、どちらが妥当であるか、結論は得られていない。ただ、そのやり方では、この言語に近いチガ語の場合うまく行かないので、本論文でも、子音前鼻音を調素の担い手と考える記述方法を採った。

以上見たような動詞各活用形のアクセントがどのように決定されているか、その決定のされ方がどの程度に規則的であるかといった検討は、後の機会に譲らざるをえない。しかし、次のようなことはいえる。すなわち、個々の活用形だけを見るだけなら、アクセントの決定のされ方が、かなり規則的に思われるが、全体を通じて一貫した規則があるかというと、そうは思えない。たとえば、語幹+aのアクセントが直説法形でCV́CV́(Ŕ)X/CVRCV́(Ŕ)X // CV́X // XŔCaの最低3種類あり、どの形ではどれかということは決まっていても、前方の接辞のアクセントの影響で一つから他が生み出されるという解釈が妥当性のあるものとしては困難である。この点からいっても、この言語の動詞アクセントは完全に規則的には決定されていないといえる。[12)]

また、この言語は、動詞自体のかつてのアクセントの対立を失っている点では単純化しているといえるが、ここに見た如く、それに伴って動詞アクセントの全体が単純化しているというわけではない、という状態を呈している。

注

1) この言語の調査は、東京外大ＡＡ研加賀谷良平教授を研究代表者とする文部省科学研究費補助金国際学術研究（学術調査）によるヴィクトリア湖周辺バントゥ諸語の調査の一環ととして、1999年にウガンダで行った。この言語のインフォーマントは、1978年にMasindi に生まれ、Hoima で育った、Mr. Muhumuza Tomである。父親はニョロ族、母親はトーロ族である。

2) w/y は、半母音としても用いられる。半母音のあとでは、語末にある場合、および、若干の場合を除いて、原則として母音が長くなるとアクセントの面から解釈される。母音自体は特に長く発音されるわけではなく、むしろ半母音のほうが母音に近く発音される。nyで表記した音は、半母音y を含むものではない。

子音前鼻音は、次の子音と同じ位置で閉鎖を形成する鼻音で、同一音素と考えるべきであるが、唇子音の前でm 、その他でn で表記する。

3) 動詞のあらわす行為の主体たる人称もしくは主体をあらわす名詞のクラスに呼応して音形交替する部分を主格接辞、行為の対象たる人称もしくは対象をあらわす名詞のクラスに呼応して音形交替する部分を対格接辞と呼ぶことにする。人称主格・対格接辞とクラス主格・対格接辞を分けてあげているが、本質的には同種のものである。

4) N は子音前鼻音。この主格接辞・対格接辞の形は、直後の音によって若干の変異を示す。§７－１参照。

5) 「クラス」というのは、印欧語等に見られる「性」に似た名詞の下位範疇であるが、名詞のあらわすものの自然的性には関係がなく、かつ、「性」よりずっと数が多い。

6) 行為の主体が何であっても、形は不変である。

7) この命名は、この言語に限る。他の言語で筆者がS_1/S_2 と名付けているものとは一致しない。

8) Ａ型というのは、バントゥ祖語の段階で語幹第一音節の高かった動詞の系統をひくもの、Ｂ型というのは、バントゥ祖語の段階で語幹第一音節を含めて低く平らであった動詞の系統をひくものである。なお、本論文における実例は、ほとんどが元来のＡ型の動詞を用いているが、元来のＢ型動詞もアクセントの点では同じであることを確認した上でのことである。元来のＢ型動詞で調査に用いたのは、

okúgwâ「落ちる、倒れる」, okúgúra 「買う」, okúróra 「見る」,
okubínga「追う」, okuhúuha「吹く」, okurámúra 「仲裁する」,
okuhindúra「換える」

等々である。

9) インフォーマントの母がトーロ族出身であることに注意せよ。インフォーマント自身ニョロ語とトーロ語をともに話すが、その違いについては、はっきり意識していた。ただし、時に混同したかも知れない。特に、母音の長短と、低い音節と明らかに高い音節の間の音節の高低が聞き取りにくく、かつブレていた。

10) 「調整規則」というのは、同じ型に属するもののアクセントを統一的に表示した場合に、主として語形が短い時に調整的言明が必要になることがあるが、それをさす。本論文では、本質的に同じ規則と考えられるものであっても、語尾が別だったり、語幹＋語

尾のアクセントが異なれば、調整規則にも別の番号を与える。

11) データにある、ここに記したアクセントとは異なるアクセントで発音された単語例を若干あげておく。

okúruka 「縫う」

okuhíka 「合う」

okuchúmita「つきさす」

okutogóta 「ゴトゴト煮える」

okuhutáaza「怪我させる」

okujúmbíka「熱い灰の中で焼く」

特に、最後の例のようなものが目につく。CVR で語幹がはじまる場合のアクセントが、CVRCV́(Ŕ)X とCV́RCV́(Ŕ)X の間で揺れており、過渡期にあるのかも知れない。ただし、その過渡期がCVRCV́(Ŕ)X からCV́RCV́(Ŕ)X への過渡期なのか、CV́RCV́(Ŕ)X からCVRCV́(Ŕ)X へのそれなのか、よく分からない。

ところで、これらを見て、元来のA型B型の対立が残っているのではないかと思う人もいるかも知れないが、チガ語などのA型B型とは全然対応しない。トーロ語の発音かとも思われるが、トーロ語の場合だと、

okuXCV́(Ŕ)Ca

で統一されているので、okuhíka, okutogóta以外は、それでは解釈できない。従って、これらは単なるブレであると解釈する。

なお、不定形から冒頭母音o を取り去った形を用いた活用形がいくつかあるが、それらのアクセントは、比較的安定している。不定形のアクセントが本文に記述したようなものであろうという推定は、そうした活用形のアクセントの検討に基づいている。不定形から冒頭母音o を取り去った形を用いた活用形のアクセントは、不定形自体のアクセントとの関係でそれらを明示するため、ややくどくなるのを承知で、本論文では実例を省略せずに示すことにする。

12) どうしてそういうことでよいのかという問題であるが、言語としては、単語にほぼ該当するもののアクセントは一定の規則にかなり沿ったものでなければならないが、単語のアクセントがそれを構成するもののアクセントから完全に規則的に形成されていることが必要というわけではないことによる。ここでは、「単語にほぼ該当するもの」というのは動詞活用形にあたり、「それを構成するもの」というのは、主格接辞とか、時称接辞、対格接辞、語幹、語尾、否定接辞等々のことである。このことは、次のように考えると分かりやすい。動詞の活用形は、決してそのすべてが同時に形成されるわけではない。従って、ある活用形が形成された時に機能していたアクセント規則と、別の活用形が形成された時に機能していたアクセント規則が同じものであると常にいえるわけではないのである。なお、同じ時期に形成される複数の活用形に働くアクセント規則が必ず同じものであるということも、証明されているわけではない。